

霧の地底湖ボート探索

意外なにぎわいを見せる穴場、お盆返上で仕事にいそしむ人々。夏本番を迎え、大忙しという各地の姿を追う。初回は宇都宮市の知る人ぞ知る地底湖。涼を求める観光客らが詰め掛けている。



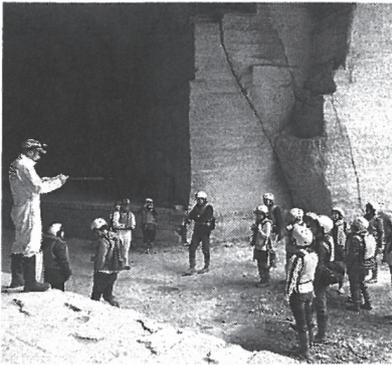
大谷(宇都宮)

古くから石垣や床材に使われた宇都宮市特産の大谷(おおや)石。同市北西部の産地、大谷町には多くの採掘場跡が残る。なかには雨水が長年にわたって流れ込み、地底湖

になったところも。湖面上をゴムボートで探索する異色のツアーが今年始まった。参加者は霧が立ち込める幻想的な光景に息をのみながら、しばし地上の暑さを忘れる。地底湖へと続く入り口は大谷石特有の白い石肌がそそり立つ。その高さは10メートルに及ぶ。「地上の気温は30度以上ですが地下は7度。上着をちゃんと羽織ってください」。ツアー担当者が参加者に呼び掛ける。天井から水



地底湖では幻想的な光景が広がる(宇都宮市)



洞窟の入り口でボートの乗り方などの説明を受ける

ひんやり60分、ツアー盛況



大谷地区は宇都宮ICから車で約15分。大谷資料館、大谷PA、宇都宮IC、新幹線、東北線、栃木県庁、宇都宮駅、東北自動車道、東武宇都宮駅、大谷地区、宇都宮支局 安倍大資

が滴る洞窟内を150メートルほど進むと、暗闇の中から薄明かりで照らされた湖が浮かび上がる。奥行き200メートルの湖面を8人乗りボートで約1時間かけてゆっくり進む。途中でボート内でも見学。五右衛門風呂ないほど天井が迫る。東京都豊島区から訪れた主婦(54)は「湖の奥には地谷石の歴史の説明を聞きながら、関連史跡を30分ほどかけて散策。宇都宮市から参加した男性(67)は「地元に住んでいても知らないことばかり。東京から来る人も多く、誇らし」と喜ぶ。ツアーは月2、3回の頻度で開催。予約はすでに9月末まで埋まっており、大盛況だ。申込先は旅行業務を手掛けるファーマーズ・フォレスト(宇都宮市)。大谷地区はこれまで、国指定名勝の奇岩群を目的に訪れる観光客が多かった。今後は地表だけでなく、地底も見逃さない。